

卒業生インタビュー

株式会社クラブハリエ

大垣 葵（文学部歴史遺産学科 2015 年度卒業生）

少し変わったお菓子のお店で働いています

私は、株式会社クラブハリエの社員として、大阪梅田のデパートの店舗で主に販売と商品発注を担当しています。クラブハリエは、滋賀県に本拠を置く菓子製造・販売業「たねやグループ」の洋菓子部門の会社で、バームクーヘンが主力商品です。

もともとお菓子が好きで、お菓子に関わる仕事ができればいいなと思っていましたが、たねやグループは、単にお菓子を製造・販売するだけでなく、自然の地形を生かした「ラ コリーナ近江八幡」という店舗を建てるなど、滋賀の自然環境や農業を大切にする姿勢がしっかりしていて、他の菓子製造業とは一線を画しています。私はそこに魅力を感じて入社しました。

職場で商品発注をかける場面では、大学時代にゼミで先生から容赦なく繰り出される質問に答えるために、事前によく調べる習慣がついていたことが役立っています。売れ筋商品は季節や天候や世の中の動きなどによって変化するため、先生の質問を先読みしながら調べた経験が役立っているなあと実感するわけです。

歴史のなかで生み出された文化財に関心がありました

生まれも育ちも京都市山科区で、小学生の頃から祖母に連れられて、お寺やお城に行くことが多く、東寺の弘法市に行くのは毎月の楽しみでした。その頃からの興味が高じて、大学でも歴史について学びたいと考えるようになりました。将来の就職先を考えるよりも自分の興味・関心のあることを学びたいという気持ちのほうが強かったですね。

ただ、自分の気持ちを深く見つめていくと、歴史そのものよりも、歴史の中で生み出された文化財のほうに関心があることに気づいて、歴史遺産学科のある京都橘大学を受験しました。歴史遺産学科のある大学は意外に少ないのです。

「まち研」を抜きに語れない大学時代でした

私の学生生活は、「まちづくり研究会」（以下、「まち研」）を抜きには語れないほどです。「まち研」とは、2001年に発足した、主に現代ビジネス学部の学生で組織する「学生学会」のことで、地域の活性化をめざす活動グループです。

文学部歴史遺産学科の学生であるにもかかわらず、私が「まち研」に入ったのは、陶灯路のポスターを目にしたのがきっかけでした。陶灯路というのは、清水焼の陶器や切り子ガラスを使ったライトアップイベントで、JR山科駅前周辺のにぎわい創出をねらった「やましな駅前陶灯路」

や、大学構内での「七夕陶灯路」などが、学生主体の実行委員会によって取り組まれます。その中心になっていたのが「まち研」のメンバーでした。

ライトアップイベント「陶灯路」の経験は、いまでも生きています

1回生のときは、「まち研」の先輩と一緒に、夏の祇園祭や冬の節分会などに行ったのが印象に残っています。まちづくりや歴史について深く考えるより、とにかく外に出て楽しんでいました。

学年が上がると、「やましな駅前陶灯路」のゾーンリーダーを任されました。駅前の公道を使うので、関係機関から許可を得るなどの手続きが必要です。また、当日は山科の老人クラブの皆さんが手伝ってくださるのですが、かなり年上の方に指示を出すことに戸惑いを感じたり、重い物を持たせないように気をつけたり、いろいろと考えながら作業を進めるのが大変でした。

私自身は大きなトラブルには遭わなかったのですが、他のゾーンでは、指示が不明確なために老人クラブの方に怒られたり、電気口ウソクなのにライターで着火して焦がしてしまったりということが起きました。先輩がやっていたことを思い出しながら精いっぱい務めたつもりですが、このような事態を阻止するのはけっこう大変だったというのが実感です。

陶灯路は、若者向けのイベントというわけではないので、どんな世代の方にも楽しんでもらえるような企画を考えたり、協力してくださる清水焼団地の方々に失礼がないように気を配るなどしました。社会人になった今、接客業務をあまり負担に感じないのは、このときの経験が生きているのではないかと思います。

また、路上で準備しているとき、通りすがりの人や自動車に「じゃまだ。迷惑だ」と思われていると感じることもあって、主催する側はまちづくりに貢献しているつもりでも、まちの人たちの評価は一様ではないのだということも学びました。

地域活動のなかで、地元・山科の魅力を再発見しました

山科三条街道商店会の「三条街道わくわくフェスティバル」に、私たち「まち研」が企画段階から参加したことも、印象深く記憶に残っています。

この商店街は、旧東海道沿いにあるので、東海道五十三次をテーマにして、各商店を関所に見立てたゲームなどで参加者をすべてのお店に誘導する仕掛けを考えたりしました。

一方、歴史遺産を学ぶ私にとっては、お店の奥に車石がひっそりと存在していることを知ったのも驚きでした。車石というのは、江戸時代に牛車用に造られた石畳で、多くの人びとが行き交った旧東海道らしい遺物です。

大学の授業で山科本願寺の土塁跡を見学したときも感じたことですが、自分が生まれ育った山科に、かつての人びとの暮らしの痕跡が残っていると知ったことは新鮮な驚きでしたし、それまでいかに地元の魅力に気づいていなかったかということも認識する機会になりました。

フェスティバル当日は、子ども向けのブースを担当して、簡単なゲームを行い、成功した子ども失敗した子ども楽しめるように意識して取り組みました。子どもたちが楽しんでくれているのを見ると、とてもうれしくなって、将来の仕事に対する私の考え方も変わったように思います。大学に入るまでは、ぼんやりと「事務職に就くのかな」と思っていたのですが、「わくわくフェスティバル」や陶灯路など、いろいろなイベントでお客さんに楽しんでもらっている様子を見てやりがいを感じるようになり、最終的に販売の現場に立つ仕事を選ぶことにしました。

文化財の保存と活用は、その価値を理解する人と地域にかかっています

清水焼団地協同組合についても、陶灯路でお世話になったほか、この組合が主催される大規模な陶器市「清水焼の郷まつり」にアルバイトとして参加したり、陶器の商品開発のモニターとして学生の意見を出してほしいと依頼され、「まち研」のメンバーが無料で陶芸体験をさせてもらったり、さまざまな思い出があります。

学内でも、先生方はもちろんですが、職員の皆さんも陰に陽にサポートしてくださいました。

このような、山科のまちづくりに取り組む人びとと身近に接したことは、歴史遺産学科の私にとって、文化財を後世に遺していくにはその価値をちゃんと認識できる人と地域の存在がカギになるということ、身をもって学ぶ機会になりました。

また、「まち研」の実践的な活動を通じて、重要な視点を捉える感覚も身についた気がします。卒論で日本の城の復元について書いたとき、機械的に復元を優先すればバリアフリーの点で問題が生じる可能性を述べ、文化政策の視点からも考察することが重要と述べました。

地域の人びととの打ち上げは、地域活動のもう一つの現場でした

人が集まって文化が生まれ、文化のあるところに人が集まる。だからなのか、山科のまちづくりの現場では、いつも人が集まって飲んだり食べたりしながら、わいわい話し合っていました。

たとえば、「三条街道わくわくフェスティバル」の打ち上げは、商店街の方からお酒や食べ物など、いろいろな差し入れが届けられるのですごく豪勢で、「成功して、よかったね。来年もやろうか！」と意気揚々とした雰囲気で行われるのが恒例でした。私たち学生も「あの打ち上げは絶対に行こう」と言って、「もう一つのわくわくフェスティバル」と呼ぶほどでした。

「七夕陶灯路」でも、積極的に参加した学生を清水焼団地の職人さんがバーベキューに連れていってくださるんです。学生の私たちから見れば、立派な大人の方ですし、伝統産業の職人さんだから、なんとなく堅苦しそうだというイメージがあったのですが、そんな職人さんの温かさに触れて、自分の印象だけで人を判断してはいけないということを感じました。

楽しさに惹かれて、妹も「まち研」に入りました

人は楽しいところに集まる、ということも、まちづくりにおいては言えるような気がします。というのも、私が家で毎日のように「まち研」の話をするのを聞いていた妹が、観光分野の仕事に就くことをめざして京都橘大学の現代ビジネス学部に入り、「まち研」でもリーダーを務めたのです。

私はまったく意識していなかったのですが、私が家族に話すことといえば、ほとんど「まち研」のことばかりで、それもすごく楽しそうに話していたそうです。実際、楽しんでいたので、それが滲み出ていたのでしょう。妹のなかで「まち研=楽しい」というイメージが出来上がったようです。

そして、地域活動においては「居場所」の存在も大きかったと思います。ふだん積極的に発言するタイプではない私も、「まち研」の会議では自分の意見をしっかり伝えようと努力しました。その会議の場となった学会室は、狭いけれどもメンバーにとって大事な居場所だったのです。授業の空き時間はとりあえず学会室に行って、そこでたわいない話や情報交換をするのが日常でした。そういう居場所と、先生や職員の方々のサポート、仲間や地域の人びととのつながりが、いまの私を育ててくれたと思います。